
いもむし

マイペンライエリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いもむし

【ZPDF】

20087M

【作者名】

マイペンライヒリー

【あらすじ】

あたしはバンドの追っかけをしていて ギタリストのセイと出会い
つた。

セイはあたしを友達に紹介してくれない。それはあたしが「いもむ
し」だから?

可愛い女になつてセイに認めてもらいたくて

あたしは整形手術を受けることにした。

世界が変わる瞬間つてあるんだね。あたしの人生はどんどんセイか
ら自立してつた。

他サイトと重複掲載を行なっています。

「L·i·v·eには来るなよー」

いつもこいつだ。今日こそ行くこいつと思つてたのに。。。先制攻撃だ。

あたしが彼女つて事が恥ずかしいんだ。

セイはあたしが高校生の時から追つかけてたバンドのギタリスト。

L·i·v·eを聴きに行つた時、まだ売れてない新人のバンドがタイバ
ンでいくつか出てたんだけどその中で いかにもヴィジュアル系バ
リバリのバンドに魂持つてかれた。

歌詞はあんまり良くないけど メロディーラインとボーカルの声がい
い。

そのバンドのギターゅやつらのセイがかっこ良くて猛烈にアタックし
た。

作曲もセイだつて事わかつたら余計好きになつた。

かなりのプレゼントをしてお金を使つたし、かなりのきわどい奉仕
もした。

あたし体とテクニックには自信あるんだ。

彼が喜んでくれる事なら どんな事でも頑張って出来ちやう。

お金だつて援助するし。

卒業と同時に家を飛び出して 彼の為に風俗で働いてる事も全然苦じやない。

あたしのマンションにセイが住むよひになつて3ヶ月になるけど
まだバンメンに紹介してくれない。

仕事とプライバシーはきつぱり分けるんだつて。

あたしはみんなでわいわい鍋をつついたり 遊びに出掛けたりする
のが夢なんだけどな。

セイはバンドのミーティングと称して飲み会にじょひりひ出掛け
帰つて来ない時もあるらしきけど、あたしはどうせ仕事だから気に
しない。

朝か昼過ぎて帰つてきてくれて 同じベッドで眠れたらそれでいい。

セイがいてくれるだけあたしは幸せ。

ただセイはあたしと連れ立つて歩く事をしてくれないのが寂しい。

「お前、化粧しないで歩くのやめりょ。」

そう、あたし化粧嫌いなの。なんか一枚多く着込んでるみたいで顔が重くて。

「化粧しないとこもむしめたいだな。お前。」

ひどいよー。セイ！ でも確かにつるんとした顔に 小さこ目だからなあ。。。

でも肌はいいんだよ。きめつてこうのへそれが整つていて色白だし、シミなんこどこにもないんだから。

美人じゃないから一緒に歩いてくれないし 紹介もしてくれないのかなあ。。。

セイ)あたしは決意した。

整形して美人になるんだ！！

そうしたらセイはもつとあたしのこと見直してくれるかな。

ホットペッパーで病院を探す事にした。

セイが一緒に歩いてくれるかわいい女になりたくて
整形手術してくれるところを探した。

ホットペッパーには載っていないんだ、エステは載ってるのに。

仕方ないからインターネットで近い所で良さそうなところを探した。

その中で雰囲気が良さそうなものがあったから早速電話で予約を入れた。

電話の応対も感じ良くて 期待度が上がった。

病院はビルの5階にあった。

あんまり人の出入りがないのは 完全予約制だからかな。

入つてみると ピンクを基調にした暖かい雰囲気で 問診表に名前を書いた。

次に個室みたいな狭い部屋に通されて テーブルを挟んで看護婦師さんとまずカウンセリング。

何をしたいのか希望を聞かれた。

あたしはまずこの小さな田を素敵な大きい田にしたいと答えた。

例えば?と聞かれ 綾瀬はるかさんの田と答えた。

それと鼻を高くしたいと言つた。

看護婦さんは小さく頷き お待ちくださいと書いてドアから出でつた。

あたしはそこにあつた整形前後のモニターの写真をパラパラとめくつて見ていた。

そこには小さく音楽が流れていって、あたしには何の曲かさっぱり解らなかつたけど たしかヴァイオリンの曲だったと思う。

しばらくしてから　名前を呼ばれて　診察室へ入った。

中年の先生が椅子に座り　カルテを見ている。

「一重の手術ですね。」

あたしが頷くと　「埋没法と部分切開法と目頭切開があります。」

さらに先生は続けて　「パンダ目形成もありますよ、たれ目になる
ように。」と付け加えた。

あつきの看護師さんちゃんと云々てくれたんだ。

あたしの顔を見ながら　先生は　ショミレーションしてくれる。

そして　目頭切開で目を大きく　ミニ切開法で一重にする事にした。

パンダ目は　まず一度一重になつてから考える事にした。

鼻も　一重が完成してから考える事にした。

まずは目だ。大きな目。あたしの憧れ。。。

来週手術の予約をして家に帰った。

セイには内緒で手術をして びっくりさせてやるんだ。

両方の手術をして52万円。

もっとと頑張って仕事しなくちゃ。

セイがツアーワークの間に田の手術をした。

すごいー！自分じゃないみたいー！

大きな目になつた。

直後は少し腫れて違和感があつたけど思つたよりも田立たないかな。

それでも仕事は抜糸まで1週間休んだけど。

傷はまだ少し赤味があるけど 化粧で隠れるから全然気にならない。

人の印象つて目力で随分変わるって事が今更ながらわかった。

前は整形する事に抵抗あつたけど 受けてみたら 化粧と同じ感覚だつた。

この間迄ぐりぐり目周りをアイラインで描かなかきや目が大きくならなかつたけど、もう今は描かなくとも良くなつたからお肌にとつてはむしろいいかも。

なんだか目の前がぱあーっと明るくなつた感じ。

視界も広がったのかなあ。

あと1週間でセイが帰つて来るけど、びっくりするだろ? な。

だんだん自分の大きな目に慣れてきて 魅力的に見せるための化粧も上達した。

そしたら昨日 駅でスカウトされちゃつた。ニュークラブのホステスだつて。

最初はアルバイトだから気楽に働いていい、って言われたから行つ

てみようと思つ。

風俗よりきれいな仕事だし。

でもあたしあしゃべりは苦手だけど大丈夫かな。

次の日そのお店に行つた。

お店は綺麗にライトアップされて大人っぽい雰囲気。

さつそくスタッフの一人に仕事の流れを説明してもらい、先輩のホステスさんと一緒にテーブルについた。

おしゃべりしなくてもいいから 灰皿替えたりテーブルの上の事だけして。と言われた。

あたしは慢じやないけど 片付けたり補充したりするの得意なんだ。

テーブル拭いたり 灰皿替えたり グラス片付けたりしてるうちに
その日は終わった。

疲れただけど なんとかやっていけそうかな。

田給18000円貰つた。ふ〜〜。

セイは1週間あたしはそこでヘルプとして働いた。

セイが夜中にツアーフラム帰つて來た。

予定よりも3日遅れた。

玄関で迎えると まじまじとあたしを見ている。

『ふふつ。こつもと違つでしょ。』 声に出でずに笑つた。

「お前なんか雰囲氣変わつたな、化粧したのか？」

まったく、セイは観察力がないんだから。整形したとは思つてないみたい。

「そつだよ。化粧に田覚めたんだよ。」 と知らんふりして言つた。

ツアーフラムにしては荷物が少ないな、身軽だな。と思つてみると、

「はんを食べた後 セイが

「今度またツアーニ出るんだけど 20万用意してくれるかな?」
と言つた。

「いいよ。明日用意しておぐ。」

その晩 あたしは久しぶりに抱かれた。

セイは疲れてるのかあたしから離れると すぐに鼾をかいて寝てしまつた。

帰つて来るの楽しみにしてたのに。。。

でもあたしも仕事で疲れててすぐに眠つちやつた。

明日銀行行かなくちや。整形でお金使つたから貯金も少なくなつて
きたし しつかり仕事覚えて稼がなくちや。

まだセイが寝ているうちに銀行へ行つた。

今迄も何度もお金を使立てているけど 今回一度に20万円という

のは初めて。

でもツアーツてお金かかるでしょ、きっと。他のバンメンも普段は何かしらのバイトして生活は大変みたいだし。。。。

うちに帰るとまだセイは寝つてたから 簡単な食事を作つておいてあたしは途中のコンビニで買って来た新聞を開く。

お店では会話はまだ殆どしないけど お姉さんとの会話に付いてくのにいろんな事を知つてないと相づりも打てないし。

昼過ぎにやつと田が覚めたセイは あたしの用意したお金を片手に持ち、もう片方の手であたしを抱いて耳元で「愛してるよ、サンキューー」と言つた。

「「ほん 暖め直すね。」と言つたけど、セイは「これからー」をイング。」と言つてまた出でつた。

お洗濯したり お掃除したりしてゐるうちにまた夕方。

お店に行く支度しなくちゃ。

お店には専属の美容師さんがいるけど あたしみたいな新人はちょっとまだ遠慮しちゃう。

だから美容室に行って簡単にセッティングしてもらわなきゃならない。

ドレスも気を使わなくちゃならないし、思つてたよりも自分の身の回りにお金がかかる。

ドレスはレンタルもあるらしいけど 毎回高いし、同じ黒のハイヒールを2着買つた。

それを交互に着回して制服のよつにした。

化粧はどんどん上達して かなりナチュラルに綺麗に見える様になった。

お店ではまだヘルプだけどだんだん周りの事も見えて来て、お姉さんたちに派閥があることもわかつた。

あたしは関係ないけど、足の引っ張り合い、密の奪い合つもあったりして、怖いよ~、女の世界。

それから2ヶ月。

セイからはなんの連絡もなじまぬ過ぎていた。

最初はあたし、メール何通も出したり、電話もかけてたけど音沙汰ないからもうやめた。

だんだん自分が虚しくなつて来るから。

今迄のメールの履歴も全部消した。もつ昔のメールを見て感慨にふけるのは止めよつ。

お金の事もセイの事も もう考えない様にした。用事があれば向こうから連絡して来る筈だから。

あたしは今の仕事がだんだん面白くなつてきていた。

あたし人の顔と名前覚えるの得意だつて事にびっくり。

一度来店してお話した人の事は殆ど覚えてる。

だから次に来店した時に お名前で話しかけると大抵感心されたり驚かれたりする。

その時お話してた内容も 家に帰つてからノートにつけておくと頭の中が整理されてすゝくいい。

男の人つて、みんな感心したり褒めてもひつのが好きみたい。

あたしは他の事何にも知らないし出来ないから ただホントにお客

さんのお話の内容に感心してるだけなんだけど。。。

ただ、驚いたり、頷いて聞いてるだけなんだけどな。

だんだんあたしを指名してくれるお密さんが増えて行つた。

それと同時にあたしに嫌がらせして来る女も出て來た。

この前は密の前であたしのドレスがいつも同じだけなされた。

「この子、入店してからずっとこのドレスなの。粗鄙野蛮貢いでも
かいぬ金ないのよねえ。」

時にはわざとドレスにお酒をこぼされたたりした。

でもそんな時同じドレスだとクリーニングに出してももう一方ある
から便利。

同じドレスをこつも着てるとお密さんもすぐ覚えてくれてるからー
石一鳥だし。

あたしは瞬く間に売り上げトップのホステスになった。

ある日同伴で食事してた時 ふと店の外に田を遣るとセイがいた。

知らない女の腰に手を回して仲良をやつに歩いてる。

昔のあたしならきっと店からセイの所迄駆け出して行つて泣いただらうけど、今のあたしは『ああ、やっぱりね。』って納得してしまつ。

もつあの男に未練なんてすつかり無い事に逆に驚くよ。

あんなに好きな男だったのに。

好きになる気持ちって変わるんだね。自分が変わったからかな。。。。

田の前の同伴のお客の方に向き直つたあたしは こいつと微笑んだ。

ある日 指名されたテーブルに着くとそこには初めてのお客さんが

ゆつたりとソファーに座つていた。

「キミの評判を聞いて 来たんだよ。」

彼はここに常連さんからあたしの事を聞いて興味本位にお店に来たらしい。

歳の頃は40歳位の身なりの上品な男だった。

話し方もゆつたりと 優しかつた。

しばらくお話してお互いに情報を聞き出していく様に感じながらも話は弾んだ。

そして彼はとんでもない事を言い出した。

「実は私はあるクラブのスカウトマンなんだよ。

こつして敵地に乗り込んでのスカウトはタブーなんだけど どうしでもキミの様子をこの町で見たかったんだ。

キミさえ良ければ 今度うちの店に来てみないか? キミならトップホステスにすぐなれるさ。」

こんなこと店の中ではつせつ言つなんて ほのいどつかしてや。

もしスタッフに知れたら大変な事になるのに。。。

あたしは この人に危害が加わらないようにお帰ししようと思つて
「わかりました。伺いますから、きょうはお帰りください。」と
小声で答えた。

彼は電話番号を書いたメモを渡しながら あたしの手を握つて
「待つてるよ、絶対に今より悪い様にしない。ママに自信持つて紹
介出来る人だ。きっと気に入ってくれる筈だよ。」

それから3ヶ月 あたしはかなり有名なクラブで働いている。

洋服も派手派手じゃなく 地味だけど上品になつた。

化粧もナチュラルでしかも凛としたものになり かなりあたしは変
わつた。

勉強もしている。今は英会話も得意になつて お客様の接待する外
国人の方ともお話が弾む様になつた。

お客様の望んでいる事が何かを的確に捉えて さりげなくサービス
し、その場に合つた楽しい会話をして 同時によい聞き手でもある
よう節度を守る。

通信大学で経営学も勉強している。

夢はあたしのお店を持つ事。

あたしだけの城。

夢を夢で終わらせない様更に努力と勉強が必要だけど あたしはきっとやり遂げる。

あたしの人生はこれからだ。

もう誰にもいもむしなんて言わせない、 あたしは蝶になるのだから。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087m/>

いもむし

2011年10月7日10時42分発行